一人ひとりがスムーズに中学校生活をおくるために

～「ひまわり学級」生徒への合理的配慮～

堺市立月州中学校　平山　杏

１．はじめに

今年度、月州中学校の支援学級である「ひまわり学級」は、知的障がい学級、自閉症・情緒障害学級２クラスの計３クラスで編成されている。ほとんど自力で中学校生活に適応していると思われる生徒から、より多くの支援が必要な生徒まで、合計１６人の在籍生徒が学んでいる。各々の生徒がスムーズに中学校生活をおくれるようにするため、支援学級担任および特別支援教育コーディネーターである経験が浅い筆者が、日頃の生徒とのかかわりや保護者の方や周囲の先生方からの声、検査結果などをもとに指導の仮説を立て、必要な支援を見出して実行している。

そこで、ひまわり学級での在籍生徒が通常の学級で適応していくために行っている支援の一例とともに今後の支援の見通しや課題を、この場所にまとめさせていただく。

２．支援の例

（１）ひまわり学級での支援の例

通常の学級では毎日多くのプリントが配布され、その中には学校などへ提出が必要なものもあるが、衝動性や忘れっぽさ、実行能力の弱さ、「気分のムラ」などから、大切なプリントをなくすことがしばしばある。また教科書やノートも、家か学校のどちらにあるのかわからなくなることが多く、授業に参加できなくなることも少なくない。また、支援学級担任が支援も行っているが、他の生徒のこともあり、時間的に１対１対応が困難な状況のときがある。なお家でも、能力や保護者の多忙さも考慮すると、プリントや教科書の管理は期待できない。以上の状況のもと、課題を克服するために支援を考えて行っている。

【支援の実際】

まずは、プリントや教科書がなくなることを防ぐために、終礼後に通常の学級の机にあるものはすべて支援学級に持ってこさせて管理している。

教科以外のプリントについては、【図１】のファイルを活用している。これは、開くと左右にポケットが２つあり、左側は保護者に見せるプリント、右側は保護者に見せたプリントのうち、学校への提出が必要なものを入れるところである。このファイルは、見開き１ページのみの点が、生徒にとって使い勝手が良いと考えた。

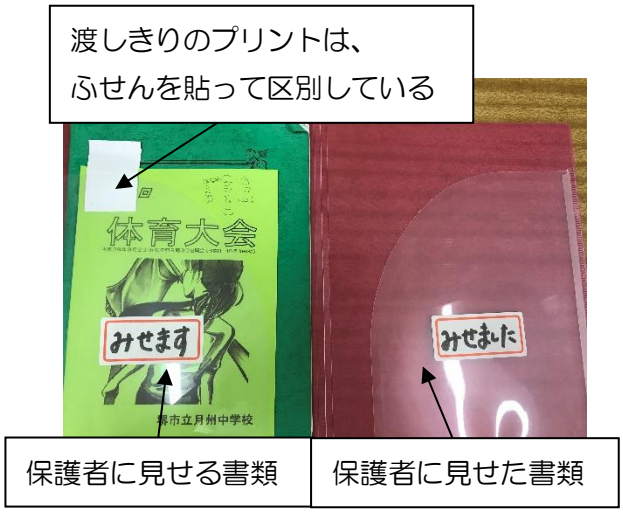
支援の手順としては、まず支援学級担任が保護者に見せるべき書類を仕分け、そして「見せます」ポケットに入れさせている。渡しきりの書類の場合は、ふせんをつけて学校へ提出すべき書類と区別させている。ちなみに上記にあてはまらない書類や教科書は、すべて支援学級に置いており、時々まとめて渡しきりで持ち帰らせている。

教科書や教科のプリントについては、すべて教科ごとに輪ゴムでくくり、ひまわり学級内のロッカーに入れさせている。【図２】図書などのタイトルからどの教科のものか一目でわかる。輪ゴムのおかげでバラバラにならないので、管理がしやすい。

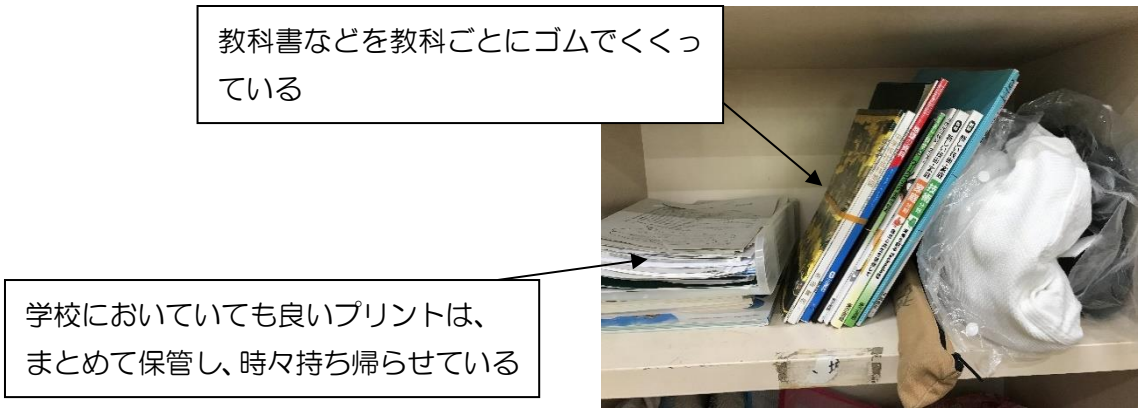
朝に、生徒が通常学級の SHR の前にひまわり学級へ来た際、【図１】のファイルを担任に渡した後、１日の時間割を確認し必要なものを準備させて通常の学級に持って行かせている。

別の生徒では、また次の日の持ち物に関しては【図３】にあるように、連絡ノートとして毎日１枚１枚クラスメイトや担任の先生から聞きとりなどを行ってファイリングしている。

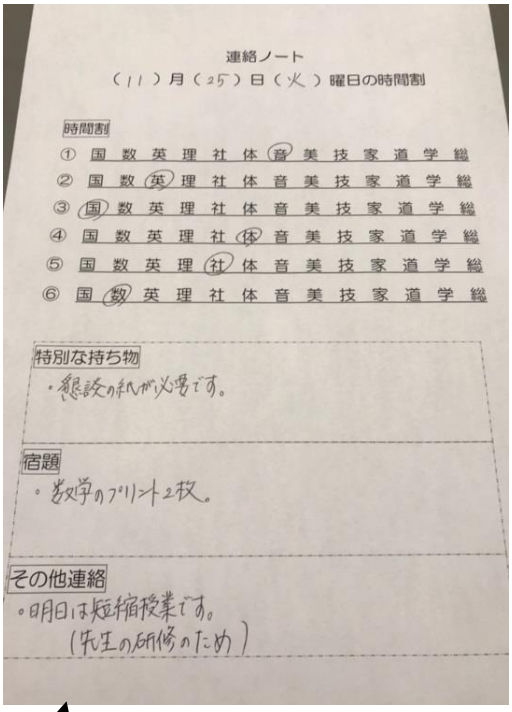
効果としては、提出物が出てないと通常学級担任から言われることが減った。通常学級での授業でも毎時間教科書やノートを机上に出し、またノート提出もしっかり行えるようになり、教科担任からも褒められることも増え、そのことをＡさん本人が嬉しそうに話してくれる。また、「がんばりシート」として、お家の人にサインや一言コメントをもらって喜んでくれることもある。【図４】



【図１】　SHR 後に整理したファイル



【図２】整理棚の様子



連絡ノート

（11）月（25）日（火）曜日の時間割

時間割

① 国 数 英 理 社 体 音 美 技 家 道 学 総

② 国 数 英 理 社 体 音 美 技 家 道 学 総

③ 国 数 英 理 社 体 音 美 技 家 道 学 総

④ 国 数 英 理 社 体 音 美 技 家 道 学 総

⑤ 国 数 英 理 社 体 音 美 技 家 道 学 総

⑥ 国 数 英 理 社 体 音 美 技 家 道 学 総

特別な持ち物

・懇談の紙が必要です。

宿題

・数学のプリント2枚。

その他連絡

・明日は短縮授業です。

（先生の研修のため）

【図３】連絡ノート

大切なプリントが保護者に行きわたらないことも多いので，学校からの連絡事項等を把握しやすいようにしている

がんばった報酬として、生徒が好きなキャラクターのシールを貼っている

がんばりシート

名前 ○○ ××

日付	行ったこと	がんばったこと	シール
10/18	・ききとり（メモの練習） ・ ・関数のグラフをかくこと	・自分でつくった学習表を見ながら、ほぼ毎日正しくグラフがかけました！	
日付	行ったこと	がんばったこと	シール
10/19	・ききとり ・言葉からの連想 ・物語の感想文	・言葉のやりとりから「いつ、どこで、…」を表にかきだして、文として表現することができました！	
日付	行ったこと	がんばったこと	シール
10/20	・ききとり ・つなぎことばの学習 ・物語文のよみとり	・物語文では、主人公の行動について、ほぼ毎日ずっとしたのが因果関係がつかめました！	
日付	行ったこと	がんばったこと	シール
日付	行ったこと	がんばったこと	シール

1週間を終えて一言（学校より）

週間を終えて一言（おうちの人より）

【図４】がんばりシート

（２－１）通常の学級における支援の例

校外学習の一つである「大阪市内めぐり」とは、班活動で大阪市内の観光施設（大阪城や大阪市立科学館など）をめぐり多くのことを学ぶ活動であるが、一人行動が目立ち自閉傾向の生徒にとって、普段の学校と異なる生活リズムは不安な気持ちが大きいせいか、『当日休もうかな...』と言うこともあった。

この活動を成功させるためには、支援学級担任がいつも横にいることも一つの選択肢だが、筆者は通常の学級の生徒と協力しながら行事を成功させていく必要もあると考えた。

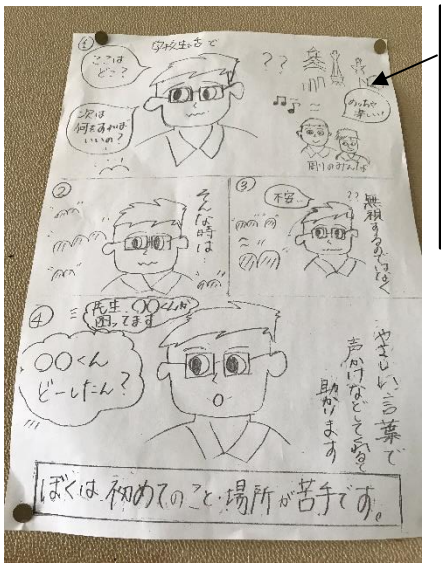
ところで、通常の学級の生徒によっては支援学級で学ぶ生徒に対して、どう接したらいいのかわからず困惑しているケースや、障がいの知識が無いことからくる偏見や不適切な関わりが助長されかねない場合もありえる。

そのために、クラスメイトが対象生徒に対して適切な関わりを持てるようになるためにはその生徒の特性について、ある程度の理解や特別な配慮が必要であると考えた。

校外学習をひかえて、下記の取組を行った。

まずは、それまでの行動観察や保護者聞き取りなどの情報をもとに、「コミック会話」【図３】を完成させ、生徒本人や保護者了承のもと、学級担任と連携しクラスの雰囲気などを勘案して、通常の学級の生徒に事績生徒の特性と配慮事項について説明した。また班活動や決めごとなどでは、より面倒見のよい生徒に個別の声かけを行い、注意深く観察してもらうよう伝えた。

指導の効果として、校外学習での事前学習における班活動では、周囲の生徒が在籍生徒に率先して声かけを行って自分の班に取り込み、個別に声かけしている様子を筆者が確認している。また校外学習当日、自分のペースで行動していた生徒たちが、在籍生徒を見ながら、合わせて行動している様子も見られた。それらのやり取りに筆者の気持ちも温まった。



在籍生徒の「初めてのことや場所が苦手」ということの特性を，コミック会話で説明したうえで通常学級に掲示
校外学習の際に困った場合のＢさんに対して、支援を求めた

【図５】コミック会話

（２－２）通常の学級における支援

通常の学級における授業では各教科担任によって進め方も異なり、例えば教科書に書いてある学習問題や図表などをノートに写させる先生もいれば、あらかじめ配布プリントに

載っていてノートに貼り付けさせる先生もいる。

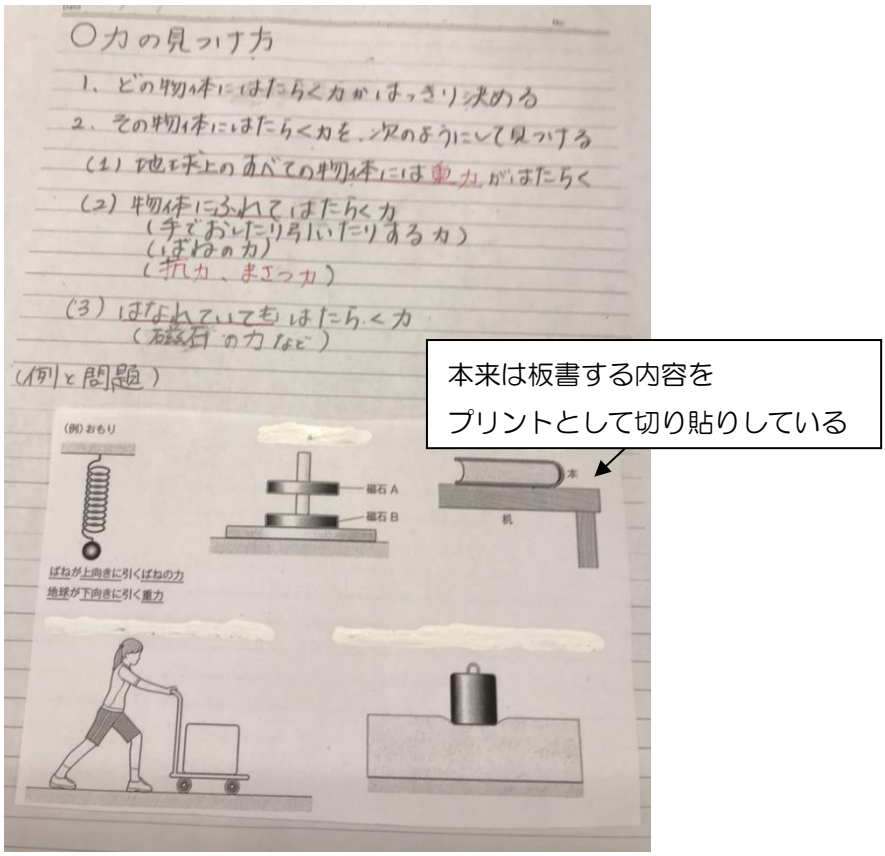
Ｄさんは形態把握や書字に困難さがあり、またノートに書く速度もゆっくりであるため、板書を写しきることができない。その課題を克服するために、Ｄさんに即した合理的配慮を関係教職員にお願いした。

そのために、支援学級で学習した字や図を書いたプリントなどをもとに関係教職員に障害特性について理解してもらい、必要な配慮事項をお伝えした。

具体的には、ノートテイクの配慮としては、授業ノートをコピーさせてもらうこと、ノートでは図などは教科書のコピーを切り貼りしたものでも構わないことなどである。【図６】

また定期テストでの配慮としては、生徒の漢字の習熟度が小学校低学年程度であることから必要な箇所のルビをうたせてもらうことや、スラッシュを入れることで生徒が読みやすい文章にすること、適度な難易度の問題を支援学級担任が精選することなどがある。

効果としては、生徒にとって学ぶ意欲につながり、日常の授業やテストに関して前向きに取り組むようになった。また、教職員の合理的配慮や特別支援教育に対する意識が高まってきている。



【図６】ノートテイクでの配慮

３．さいごに（今後の課題と支援の見通し）

最後に、ひまわり学級在籍生徒から見えた課題と見通しについて述べたい。

まずたとえば話をすることが好きな在籍生徒がいたとする。ひまわり学級の生徒の場合、通常の学級では引っ込み思案でなかなか自分の気持ちを表現できないせいか、ひまわり学級では支援学級担任によく話すことが多い。集中力や記憶の弱さ、状況把握、話し言葉の使い方などに課題があるため、会話のみでは状況がつかみ切れないことも多い。ふだんの何気ない会話ではある程度こちらで予想して言葉のやり取りを楽しめばよいが、ひまわり学級で「お腹痛い」などと訴えてくる場合もあり、その場合は裏に学校生活を送るうえで何か大きな要因を含んでいる可能性もある。その主訴を丁寧に聞き取ってそれをもとに対応しなければならない。

その場合は本当に生理的にお腹が痛いということもあるが、今まで見取った中では、通常学級の人間関係の中に原因があり、そこへ戻りたくないことも多かった。そのため、どのような意図でお腹が痛いと言っているのかきめ細かく聞き取り分析して対応しなければならない。ただし、知的能力をはじめ諸々の能力に課題がある生徒たちは、通常の学級の授業にずっと参加することは厳しいと思われ、筆者がひまわり学級の生徒のことを理解しなければならない部分も多々見受けられる。通常学級の授業に関しては、生徒たちができることとできないことを区別してできることのみを行わせるように指導しているが、授業は板書１つとっても授業形式は教科担任により多種多様であり、決してそのことは在籍生徒にとって学習環境が良いとはいえない。

そのために学校としてユニバーサルデザインの授業を推進していく必要があるし、全教職員がより生徒理解をもとにした指導を行うために、それらの先生方へ向けて具体的に個々の生徒の能力（できることとできないこと）を伝えていく義務があると感じている。

それとは別により充実した中学校生活をおくるためにも、支援学級の学習の中で、好きなことをもとにした授業を展開してもよいと思っている。在籍生徒は一人ひとり普段の会話などの中から、『自分なりに予想して科学実験をしてみたい』や『ビオトープをつくりたい』など好きなことをしたいという気持ちがあり、それを教科の授業や自立活動とは別に行っていけたら、生徒の心をととのえる意味でもより生徒たちなりに充実した中学校生活になるのではないかと考える。今後そのような何気ない言葉から気持ちをくみとって、合科などの時間で授業を行っていき、その成果を今後学習発表会や参観などで発表ができたらと思う。